

平成 23 年 10 月 27 日

各 位

会社名 株式会社ウェッジホールディングス
代表者名 代表取締役社長 田代 宗雄
(コード 2388 大証 J A S D A Q 市場)
問合せ先 執行役員経営管理本部長 浅野 樹美
(TEL 03 - 6225 - 2207)

タイ洪水被害の当社グループへの影響について (第 4 報)

当社の連結子会社である Group Lease PCL (以下、G L) における、この度のタイ国内での洪水発生に伴う影響に関しまして、平成 23 年 10 月 27 日朝の時点で確認されております事項をご報告いたします。

記

1. G L 本社近辺について

G L 本社近辺につきましては、昨日と変わらず、通常通りの営業を行うことのできる状況です。
(通常営業中の G L 本社に返済に訪れた顧客)



2. G L アユタヤ支店近辺について

G L のアユタヤ支店の状況につきましては、すでに平成 23 年 10 月 20 日にお知らせいたしておりますように営業停止の状況にありますが、一昨日時点では、すでにアユタヤ支店付近の水深が下がり始めたとの報告を受けております。なお、当社会長がアユタヤ支店長と話しましたところ、アユタヤ支店に勤務します G L の従業員 17 名全員と連絡が取れている状態ではありますが、15 名が被災いたしました。そのうち 1 名は避難所に移り、他の 14 名は自宅の一階が浸水しても二階で生活が可能な状態とのことです。また当社のアユタヤ支店事務所とその周辺は一切浸水しませんでした。水の状況はすでに 1 週間以上水位が上昇することはなく、漸次水位が下がりつつあるとのことです。アユタヤ地区において、G L の会社としての人的被害はなく、現時点では物的被害はなかったと判断しております。

新しい報告が入り次第お知らせいたします。

3. G L その他の支店

タイ最大の工業地帯であります、イースタンシーボード地域 3 支店、タイ東北地方のナコンラ

チャシマ県1支店につきましては、洪水の影響はなく、今後とも影響を受ける可能性は低いと現時点では判断しております。

4. バンコクの状況について

バンコク全体において、全地区それぞれが浸水する可能性は完全に否定できるものではありません。GLから北に10キロのドンムアン空港（旧空港。現在は主に国内の格安航空会社用に共用されている）が25日午後7時より滑走路北側浸水により閉鎖されました。一方、GLから北に7キロのプラパー運河（ドンムアン空港の西南5キロ）に周辺においては一定の急造堤防が完成し、周辺の浸水もポンプによる排水が進んで乾いた状況になってきております。このように極めて近い距離においても一進一退を繰り返しております。

(GL北7キロ排水前) (GL北7キロ排水後)



(ポンプによる排水作業)



5. GLの状況について

25日、マネージメントによる会議が開かれ（当社会長此下竜矢、当社子会社エンジンホールディングス取締役各位も参加）、a. バンコクが浸水し、本社業務が数日間閉ざされた場合、b. 同、数週間閉ざされた場合の業務フローについて確認し、実行できることを確認しました。

内容は以下の通りです。

- ① a, b のどちらの場合においても、GLへの影響は限定的であるとの見通しを確認をしました。
- ② それぞれの場合において、GLの主要株主であるAPFグループからの協力も受け、臨時本社事務所を設立できることを確認しました。
- ③ それぞれの場合に立ち上げる、臨時の指揮命令系統を確認しました。
- ④ 銀行システム等に問題が起こった場合でも実行可能なオートバイ販売会社等に対する支払方法並びに手順を確認をしました。
- ⑤ 手持ち資金が十二分にあるため、従業員の被災に備え、給与の前払いを実行することを決定しました。

当社会長此下竜矢よりの報告

(ドンムアン空港前)

(ドンムアン空港前の道路)

1. GL本社より約10キロにあるドンムアン空港（旧空港）前のVipawadi通りは2日間で約4キロメートル浸水が広がっていることを確認しました。現在ドンムアン空港は閉鎖されております。政府は排水等を急いでおります。ただし、バンコク東部に位置しますスワナプーム空港（新空港。現



在のバンコクの玄関口) は正常に運用されております。

2. 25日市内の一部において降雨がありました。しかしながらバンコク北部など現在の注目の地域には降らず、限定的でした。

(バンコク北部新興住宅街と造成前の湿地)

3. バンコク都50区のうち、10以上の区において浸水が起っており、特にバンコクの周辺部にあたる地域が多く、東京都で例えるのであれば、23区ではなく、多摩地区のような郊外にあたる地域が浸水しております。バンコクはもともと低湿地に位置し、チャオプラヤ川の氾濫原にあたる地区にあります。これら郊外には広大な低湿地や運河が残っております。現在でも都内の空き地といえば、日本のような野原にはならず、葦の生える沼のようになります。通常、これらの土地に土を盛り、造成をして住宅や商業地区を作ります。



また、アユタヤやバンコクでは昔から運河を船で通行することが主だった交通手段でした。現在においても船が交通手段として一定の地位を保っています。過去の運河が次々に埋め立てられ、道路になったものが多く、これらの道路は少し標高が低くなっています。

(運河から住宅街への浸水状況)

このため、増水が起こると、これらの湿地、運河、道路が影響を受けることになります。また、低湿地造成の高さによっては浸水が起っています。そのため、一つの地域においても浸水する場所と、浸水しない場所がはっきりと分かれ、まだらに浸水しています。人々はビルの駐車場、橋脚の上、高くなっている区域に車やオートバイなどを移動させて重要な資産を守っています。



あれだけの被害が伝えられるアユタヤに所在する、GLのアユタヤ支店が全く浸水しなかったのもこのためです。また、アユタヤ地区の日系企業が操業を早くも再開したという報道が伝えられたと思いますが、一部においてすぐに回復しているのもこのためです。

増水時には、これらの運河などから水が流れ込むことになりますが、勢いは激しいものではなく、徐々に水が増えていくと印象です。実際に水が流れこんでいる中に立っても、流れに足を取られるということはありません。

また、タイの人々は規模は小さいものの、毎年このような洪水が起こることもあり、それほど深刻ではないように見えます。増水した川で魚を取る人が列をなしていますし、増水した水の中を泳いだり、水の中で生活したりと、日本の洪水ではおよそ考えられない光景がそこにはあります。あらかじめ準備ができていること、それほど激しい水の流れではないことが原因だと考えられます。

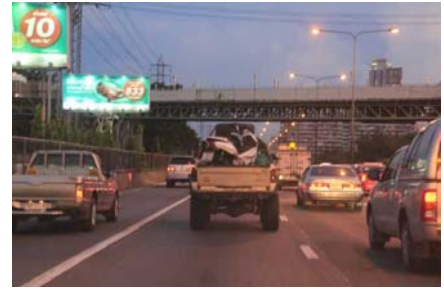
4. 政府からの告知もあり、バンコク都民は水や食料を買いだめに入っています。そのため、水などがすぐに売り切れるものの、都内を回って調べたところ、水や食料の供給は止まっておらず、ス

ーパーマーケットなどもまだ通常営業であり、追加の水や食料もある程度調達されています。

(出勤ラッシュ状況)

(帰宅ラッシュ状況)

5. バンコクにおいては祝日明けの 25 日火曜日よりいつも通りの通勤渋滞が起きている。被災地域の人々は、水深の浅いところではバス



などがまだ運行されているためこれを利用し、水深の深いところからでは、軍などがトラックで人を運ぶなどして家まで出退勤しています。報道で被災地から避難している画像を見ることがあると思いますが、かなりの割合は、実はこのような家と職場や市場との往來の様子であったりするようです。

6. バンコク都並びに周辺においても電気、水道、電話、インターネットなどのインフラは途切れず供給されています。

(買い物後に軍のトラックで帰宅する市民)

7. 浸水が始まった地域においては、警察、軍などの公的機関の救済に加え、民間人の助け合いが機能しております。彼らは士気も高く、あらゆるところで、人と人が荷物を受け渡し、機械や車両などを融通する風景が見られます。知らないおばあさんが水の中を運んでいると、若者が声をかけて荷物を持つなどの風景は被災地域のいたるところに見受けられます。一定の秩序が守られており、機能しています。



8. 現地の報道による情報も錯綜しています。テレビで、この地区に浸水した、今、水が進んで来て、何時にはこの交差点に達するといった報道がなされています。実際に行ってみるとそうではない、ということが起こっています。日本での各種情報の中にも、このような情報が混在しているようです。

9. 本日および明日、タイ湾は大潮を迎え、満潮時の海の潮位が高まることから海または運河などからの排水が進まなくなり、バンコク市内で増水する危険性が指摘されています。この数日間をもっとも重要な日と位置付けて、監視、対策を進めてまいります。

10. 私の情報と報道等による情報が食い違っているとお考えになる、株主様、投資家様、市場関係者もおありかと考えます。これは、わたくしがGLとタイ全般の状況をご報告しているのに対し、報道機関は、被災が起きている場所を報道する災害報道であるという視点の違いが大きいと考えております。また、報道機関が政府発表などを伝えるマクロな視点を中心にする一方で、わたくしは自分で見て回ったミクロな視点を中心に行っていることも影響していると考えております。

また、新たな情報等がありましたら、投資家の皆様、市場関係者の皆様にご報告申し上げます。

なお、先日から掲載している写真につきましては、すべて当社会長の此下竜矢が現地にて撮影したものです。

以 上